

## 情報構造の類型論的研究 —「係り結び」の位置づけとも関連させて—

2016/09/20 @国立国語研究所

風間伸次郎

### 0. はじめに — 情報構造の類型論的研究

東京外国語大学の語学研究所で刊行している『語学研究所論集』([https://www.google.co.jp/?gws\\_rd=ssl#q=%E8%AA%9E%E5%AD%A6%E7%A0%94%E7%A9%B6%E6%89%80%E8%A B%96%E9%9B%86](https://www.google.co.jp/?gws_rd=ssl#q=%E8%AA%9E%E5%AD%A6%E7%A0%94%E7%A9%B6%E6%89%80%E8%A B%96%E9%9B%86))では、ここ7年に亘って一定の文例アンケートに基づき、多くの言語から主に日本語を媒介言語として演繹的に例文を収集している。これまでのテーマは、受動表現、ヴォイス、アスペクト、モダリティ、他動性、連用修飾複文、所有・存在表現、であったが、8年目の今年度は「情報構造と名詞述語文」というテーマでのデータ収集を行った。

そこで収集できたデータは22の言語に関するものであった。これらの言語を語族別に見ると、まずドイツ語、フランス語、スペイン語、ペルシア語、ウルドゥー語は印欧語族の言語である。ソロン語、ナーナイ語はツングース諸語、ダグール語、モンゴル語はモンゴル諸語、トルクメン語はチュルク諸語に属するが、これらは（系統ではなく）構造的な類似などの点からアルタイ諸言語としてまとめられることのある言語群である。フィンランド語とハンガリー語はウラル語族、アラビア語はアフロ・アジア語族、グイ語はコイサン語族の言語である。クメール語はオーストロアジア語族、マレーシア語、インドネシア語はオーストロネシア語族、ラワン語、ビルマ語とともに、中国語は（異論もあるが）シナ・チベット語族、とされている。朝鮮語、日本語は系統的に孤立した言語とされている。

使用したアンケートの例文は下記のとおりである。

- [1] 「えっ、一郎 [／固有名詞なら何でもよい、以下も] が来たの?」「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」【対比焦点（主語）】（例えば、昨日の集まりに珍しくやって来た人についての会話で）
- [2] 「誰が来た（の）?」「一郎が来たよ。」【WH焦点（主語）・WH応答焦点（主語）】
- [3] 「一郎の方が大きいんじゃないの?」「いや、一郎じゃなくて、次郎の方が大きいんだよ。」【YesNo疑問・形容詞述語応答焦点】（一郎と次郎の背について話している状況で）
- [4] [電話で]「どうした（の）?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」【文焦点（自動詞文）】
- [5] 「あの子供が一郎を叩いたんだって!」「いや、一郎じゃなくて、次郎を叩いたんだよ。」【対比焦点（目的語）】
- [6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う（の）?」「（私は）青い袋を買うよ。」【対比焦点（目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合）】
- [7] 「一郎はどうした?」「一郎は朝からどっかへでかけたよ。」【述語焦点（用語について後述）】（例えば、朝少し遅く起きて来た一郎の父親が、姿の見えない一郎について母親に尋ねている場面で）
- [8] 「（あの子供は）誰を叩いたの?」「（あの子供は）自分の弟を叩いたんだ。」

【WH 焦点（目的語）・WH 応答焦点（目的語）】

[9] [電話で]「どうした（の）？」「うん、一郎が（自分の）弟を叩いたんだ。」

【文焦点（他動詞文）】（例えば、電話の向こうで子供の泣き声がかきたのを聞いての発話）

[10] 「あのケーキ、どうした？」「ああ、（あれは）一郎が食べちゃったよ。」

【目的語主題化、主題（目的語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

[11] 私が昨日お店から買って来たのはこの本だ。【分裂文】

[12] あの人は先生だ。この学校でもう 3 年働いている。【措定文 主題（名詞述語文の主語）の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

[13] 彼のお父さんは、あの人だ。【倒置指定文】

[14] あの人が彼のお父さんだ。【指定文】

[15] あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。【定義文】

[16] [何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて]「私はコーヒーだ。」【ウナギ文】

[17] [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか？」との問いに]「コーヒーは私だ。」【逆行ウナギ文】

[18] 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

[19] [砂糖の入れ物を開けて]「あっ、砂糖が無くなっているよ！」【意外性（mirativity）】

[20] 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！ 田中君だったな。」【思い出し】

このうち今回問題とするのは、特に 1 番から 10 番の例文である。

文の情報構造の種類はおおまかに次のような体系をなしているとする事ができよう（先行研究の確認が必要）。なおここで「題述」（comment）と呼ぶものは、動詞等を中心とする述語句のみではなく、「述語句を中心とし、主題や焦点項以外の名詞項も含むもの」である。例えば、「私は 16 日に北海道日高山脈のポロシリ岳に登った」という文では、下線の部分全体が「題述」である。これによって「述語」（predicate）と区別し。「述語焦点」と呼ばれていたものも、「題述焦点」と呼ぶことにする。

〈1〉 題述焦点（／項主題） —— （属性叙述 vs. 事象叙述 ??）

〈2-1〉 主語焦点

〈2〉 項焦点（／述語主題） —— 〈2-2〉 目的語焦点

〈2-3〉 他の名詞項焦点

〈3〉 文焦点（／主題なし、もしくは状況が主題）

今回の調査から、まずおおまかに次のようなことが言える。

① 通言語的に、〈1〉 題述焦点でもっともデフォルトの表現構造が現れる。

② 〈2-2〉 目的語焦点がこれに続いてデフォルトであるが、〈2-1〉 主語焦点となると述語の名詞化などをはじめとする一定の構造が必要とする言語が多くなって来る。



jùjù là(=Twá)=Tà.  
 NAME come(=go)=NC:RLS

[2] 「誰が来た (の) ?」 「コーコーが来たよ」

A-1 bǎDù là=Tà=lé.  
 who come=名詞化標識=Q  
 B-1 kòkò là=Tà.  
 NAME come=名詞化標識

アラビア語では、対比主語焦点[1]の応答文で、述語動詞句を定冠詞 *lli* で名詞化し名詞述語文「ハナーン(こそ)が、来た者だ」としている。Wh 焦点[2]では質問文応答文とも名詞化し語順も転倒させている。対比目的語焦点の[5]では *da* 「それ」を主題とし、「それは、ホセインを叩いたのだ」という文になっている。

[1] 「えっ、リーム(女性)が来たの？」

*eː da?! riːm gat?*  
 何 これ(男) リーム(女) 来た(彼女)

「いや、リームじゃなくてハナーン(女性)が来たんだ。」

*laʔ, miʃ riːm. di hanaːn hejja lli gat.*  
 いいえ 否 リーム(女) (小詞) ハナーン 指示詞3単女 定 来た(彼女)

[2] 「誰が来たの？」 — 「ホサームが来たよ。」

*miːn elli geh? — da hosaːm elli geh.*  
 誰 定 来た(彼) (小詞) ホサーム 定 来た(彼)

[5] 「あの子供がムハンマドを叩いたんだって!？」

*ʔaːl ɛl-walad da qarab mehammad*  
 ですって? 定- 男の子 その(男) 叩いた(彼) ムハンマド

— 「いや、ムハンマドじゃなくて、ホセインを叩いたんだよ。」

*laʔ, ma-qarab-ʃ ɛmhammad, da qarab hoseːn.*  
 いいえ 叩かなかった(彼) ムハンマド それ(男) 叩いた(彼) ホセイン

中国語では対比主語焦点[1]の応答文で、是(コンピュータ)を用いて節を補語の位置に用いた文を作ることができる。対比目的語焦点の[5]では分裂文を用いた方が自然であるという。

[1] 「えっ、小張が来たの？」 「いや、小張じゃなくて小李が来たんだ。」

“咦，是 小张 来 了 吗？” “不，不 是 小张 来 了， 是 小李 来 了。”

えっ [繫辭] 小張 来る [実現] [疑問] [否定] [否定] [繫辭] 小張 来る [実現] [繫辭] 小李 来る [実現]

- [5] 「あの子供が小張を叩いたんだって!」「いや、小張じゃなくて、小李を叩いたんだよ。」  
 “那个 孩子 打 了 小张？”  
 あの 子供 叩く [実現] 小张  
 “不，他 打的 不 是 小张，是 小李。”  
 [否定] 彼 叩く [の] [否定] [繫辞] 小张 [繫辞] 小李  
 「いや、彼が叩いたのは小張じゃなくて、小李だよ。」

ダグール語では対比目的語焦点[5]で、チチハル方言およびプトハ方言では分裂文、ハイラル方言ではコピュラを用いたノダ文に似た文が現れている。例文は省略する。

インドネシア語では、対比主語焦点の[1]の応答文で、Wh 主語焦点の[2]では質問文応答文の両方において、yang により節名詞化したものを主語／主題にし、項焦点を述語化している（疑似分裂文）。対比主語焦点の[5]の目的語では応答文で yang により選別（「～の方」という意味、以下「選別」という用語で呼ぶ）を示し、語順も逆転した文が可能である。対比目的語焦点[6]の目的語では質問文応答文とも、yang により選別を示すものの、普通の語順の他動詞文を用いる。なお調査者によれば、例えば *Siapa yang datang?* において、*siapa* が「述語」であるという。「述語」の定義についてもよく検討しなければ、語順の逆転等を考える際に、問題となる。この点に関しては今後の課題とする。

- [2] 「誰が来た（の）？」「一郎が来たよ。」  
*Siapa yang datang?*  
 who REL come 「誰が来たの？」  
*Yang datang siapa?*  
 REL Come who 「来たのは誰？」  
*Ichiro yang datang.*  
 Ichiro REL come 「一郎が来たよ。」

スペイン語では対比主語焦点の[1]、および対比目的語焦点の[5]の応答文で分裂文を用いる。Wh 主語焦点の[2]の応答文では語順を VS に転倒している。

- [1] 「えっ、一郎が来たの?」「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」  
 a. ¿Eh? ¿Vino Ichiro? –No, es Jiro el que vino, no Ichiro.  
 eh? came ichiro? –no, is jiro the REL. came, not ichiro
- [2] 「誰が来た（の）？」「一郎が来たよ。」  
 a. ¿Quién ha venido? –(Ha venido) Ichiro.  
 who has come(pp)? –(has come(pp)) ichiro
- [5] 「あの子供が一郎を叩いたんだって!」「いや、一郎じゃなくて、次郎を叩いたんだよ。」  
 a. ¿Que ese niño ha pegado a Ichiro? –No, a Ichiro no; ha sido a Jiro (al que ha pegado).  
 CONJ. that boy has hit(pp) A ichiro? no, A ichiro not; has been A jiro (A+the REL. has hit(pp))

ハンガリー語は情報構造の標示に関して敏感であり、独特のシステムを持つ言語だが、ここでは特に、動詞直前位置に焦点を置くという語順の規則と連動した動詞接頭辞の分離／非分離という形式の違いが働く。[1]、[2]、[5]、[6]の質問文、および[3]の疑問文応答文において、焦点である項は動詞直前位置を占める。[1]、[5]の質問文ではさらにこの位置を空けるため動詞接頭辞の分離も起きている。さらにこの言語には目的語の定不定によって動詞の活用が分かれる。例文は省略する。

以上が項焦点に際して述語の名詞化等を要求する言語だが、地域や類型に関して特に偏りは見られない。強いて言えば、逆にこれらの言語はデフォルトの動詞形式の動詞性が強い言語で、それがために項焦点に際して述語の名詞化等を使用しなければならないという制約を伴っているタイプの言語であるとみることができのかもしれない。インドネシア語／マレーシア語はそうした性格の最も強い言語であるように見受けられる。

特に主語と目的語の違いによって、述語の名詞化等に違いが出るかどうかを見るために、上記の記述の内容を表に整理してみたのが次の表1である。

表 1: 項焦点において述語に有標な形式の現れる言語の数 (/22) —主語と目的語での違い

	主語 ([1][2][3])	目的語 ([5][6][8])
動詞・対比質問文 [1] vs [5][6]	2	3
動詞・対比応答文 [1] vs [5][6]	5	4
<b>Wh 質問文 [2] vs [8]</b>	<b>5</b>	<b>1</b>
<b>Wh 応答文 [2] vs [8]</b>	<b>5</b>	<b>2</b>

ここでは特に **Wh 質問文** と **Wh 応答文** のデータにおいて、はっきりとした違いが見られる。やはり既知の主題主語に関して、目的語が何であるかを尋ねたり答えたりすることの方が、主語が何であるかを尋ねたり答えたりすることよりもはるかに一般的であり、頻度も高く、それがためにデフォルトの述語が用いられるのではないだろうか。

## 2.2. とりたて (: 名詞項における標示)

次に、述語の方ではなく、名詞項の方に何らかの標示を行う言語を見てゆく。

明示的な焦点標識 (非主題標識) を有し、これを用いている言語は朝鮮語のみである。朝鮮語では対比焦点の[1]および **Wh** 焦点の[2]で質問文応答文とも主題形式でなく主格形式を用いる。これにより項焦点が示される。

朝鮮語以外の SOV 語順の言語には、定対格と不定対格 (∅ 形式の言語が多い) の対立をもつものが多くあり、対比目的語焦点の[5][6]および **Wh** 目的語焦点の[8]では、定の目的語の形式が用いられる。この定の形式は、主題とも焦点ともなりうるものであるが、さらにおそらくはプロミネンスを伴うことによって、焦点を示しているものと考えられる。特に対比の[5][6]においては、名詞の側に何らかの選別形式 (「～の方」) を用いている言語が多く存在する。

定対格と不定対格の対立をもつ言語は、ペルシア語、トルクメン語、ダグール語、モンゴル語、であり (ナーナイ語、ソロン語でもその違いが関与している可能性がある)、これ

らはもっぱら SOV 語順を示すアルタイ型言語である。

ペルシア語では[5]、[6]、[8]の質問文応答文とも、定対格を用いる ([5]の応答文では任意)。[6]の質問文の疑問詞に接尾辞形人称代名詞 (必須) を付して選別を示している。トルクメン語では[5]、[6]、[8]の応答文で定対格をとる。「どちら」は 3 人称の所属をとるが、これには選別的機能があると思われる。ダグール語では、[6]において質問文応答文とも、疑問詞とその答えの焦点に 3 人称所属を付して選別を示している。モンゴル語では[6]において質問文応答文とも、疑問詞とその答えの焦点に 3 人称所属を付して選別を示している (ホルチン方言の[6]の応答文を除く)。[6]、[8]の質問文応答文とも、動詞直前の位置であっても定対格や再帰などの形式を用いる。以下にペルシア語[5]、トルクメン語[6]、モンゴル語 (ハルハ方言) [8]の例を示す。

[5] 「あの子供がアリーを叩いたんだって!?!」「いや、アリーじゃなくて、レザーを叩いたんだよ。」

un            pesar-e            'ali            ro            zade?  
あの(COL) 少年-DEF.SUF アリー      POSTP(COL) 殴る PAST.PTCPL

na,            rezā            ro            zade,            na            'ali (ro).  
いいえ レザー            POSTP(COL) 殴る PAST.PTCPL            ADV.NEGアリー-(POSTP,COL)

[6] Bärde    gyzył    we    gök torba-lar bar.    Haýsy-sy-ny    al-jak?  
ここに 赤い と 青い袋-PL ある    どちら-3.POSS-ACC    買う-DEF.FUT  
Gög-i    al-jak.  
青-ACC    買う-DEF.FUT

[8] 「(あの子供は)誰を叩いたの?」「(あの子供は)自分の弟を叩いたんだ。」

Xal. “Хэнийг зодсын?” “Өөрийнхээ дүүг зодсон”

xenijg	zodsiin	öörijnxee	düüg	zodson
xen-Ilg	zod-sAn-IlIn	öör-IlIn-AA	düü-g	zod-sAn
who-ACC	to.hit-PERF-Q	own-GEN-REF	younger.sibling-ACC	to.hit-PERF

### 2.3. 述語の非出現

上記の言語群は、述語の側にせよ、名詞の側にせよ、何らかの積極的な表示により、項焦点を示そうとするタイプの言語であった。これに対し、いわば消極的な方法として、応答文において焦点の名詞項のみを発話する言語がある。

フランス語では対比焦点の[1]、[2]の応答文で主語のみもしくは *It is Ichiro* 型となる。スペイン語では *Wh* 焦点の[2]および[8]の応答文は主語のみ、目的語のみでもよい。フィンランド語では[1]の応答文では *It is not A but B* 型の表現で述語は非出現であり、[2]の応答文でも述語は非出現である。ラオ語とハンガリー語では[1]、[2]、[5]、[6]、[8]の応答文はどれも主語/目的語のみでよく、クメール語では[1]の応答文は主語のみでよい。ウルドゥー語では[8]の応答文において主語が非出現で、[6]の応答文は主語も動詞も非出現でよい。ダグール語プトハ方言では[1]や[8]の応答文が主語のみであり、ナーナイ語では[2]の応答文が

主語のみでよいという（ただし媒介言語のロシア語に誘導された可能性がある）。フランス語[1]、フィンランド語[2]、ハンガリー語[5]、ウルドゥー語[6]の例を示す。なお、名詞項のみで答えた場合、それが *Jiro (came)* の ( ) 部分の省略を通じて生じたのか、(It is) *Jiro* の ( ) 部分の非出現を通じて生じたのかも問題であるが、これは当然 (It is) *Jiro* から生じたものだろう。

[1.a] 「えっ、一郎が来たの?」「いや、一郎じゃなくて次郎が来たんだ。」

*Hein? Ichiro est venu? Non, pas Ichiro, c'est Jiro qui est venu.*  
 eh Ichiro come.PST No NEG Ichiro, PRST Jiro REL.N come.PST

[1.b]

*Hein? Ichiro est venu? Non, pas Ichiro, Jiro.*  
 eh Ichiro come.PST No, NEG Ichiro, Jiro

[2] 「誰が来た (の) ?」「Tomi が来たよ。」

*Kuka tul-i? Tomi.*  
 who:NOM come-IMP.3SG Tomi:NOM

[5] 「あの子供がヤーノシュを叩いたんだって?」「いや、ヤーノシュじゃなくて、タマーシュを叩いたんだよ」

„AZ A GYEREK üt-ött-e meg János-t?”  
 that the 子供 たたく -PST-DEF.3SG PRV [完了] ヤーノシュ-ACC  
 „Nem, nem János-t, hanem Tamás-t.”  
 いや NEG ヤーノシュ-ACC ではなく タマーシュ-ACC

[6] 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う (の) ?」「(私は) 青い袋を買うよ。」

*lāl aur nīlē thailē meṅ se*  
 赤 ADJ.OBL. と 青 ADJ.OBL.sg. 袋 OBL.m.sg. LOC. ABL.  
*tum kaunsā lo ge? nīlē wālā (lūṅ gā)*  
 君 NOM. どちら NOM.m.sg. 買う FUT.m.2.pl. 青 ADJ.OBL.-PTCP (買う FUT.1.m.sg.)

このように、述語の方を非出現（省略とは考えたくないの、「省略」という用語の使用を避けている）にできる言語は、名詞の持つ述語的な性格が強く、亀井・河野・千野（編）（1996）がいうところの両肢型言語であると考えられる。上記の言語にはウラル語族の言語を含むヨーロッパの諸言語および東南アジアの孤立語が多く現れていることがわかる（なお、スペイン語、ラオ語など、主題主語が現れない言語もあるが、これもヨーロッパの印欧語と東南アジアの孤立語の組み合わせとなっている）。これに対し、述語の名詞化や名詞側での定対格の表示を用いる言語は、述語の非出現が許容されないタイプであり、亀井・河野・千野（編）（1996）がいうところの単肢型言語であると考えられる。

このことについて、日本語を例に少し考察してみたい。日本語で[1]の調査例文における



「えっ、一郎が来たの？」や「あの子供が一郎を叩いたんだって!？」という質問文に対し、「いや、一郎じゃなくて次郎(だ)。」とコンピュータ文によって答えるのはやや不自然である。もしくは述語を非出現にして名詞項のみを残し、「いや、一郎じゃなくて次郎が。」もしくは「うん、一郎が(自分の)弟を。」などと答えるのはきわめて舌足らずな、何か途中で発話をやめたような印象を伴う。このように日本語のような単肢型言語では、述語の非出現が許容されにくいことがわかる。このことは日本語が暗示型主要部表示型(風間(2015a), (2015b))の言語であることとも無関係ではないだろう。

以上に見てきたように、項焦点の表現に関しては、大きく分けて3つの手法(述語有標型(述語の名詞化)、項有標型(とりたて)、述語非出現型)があるようだ。さらに無標示型(項焦点の標示はプロミネンス、もしくは語順の操作によっていると考えられる)がある。さらにこれらの手法を併用する言語もあることに注意しなければならない。項焦点における手法、特に名詞化については、4. でさらに考察する。

### 3. 文焦点(ノ主題なし、もしくは状況が主題)

文焦点に関する諸言語のデータ(調査例文の[4]、[9])をみると、全体的にどの言語でも存在文のストラテジーを用いて文焦点であることを表現しようとする傾向が観察される。基本語順の類型論的なタイプによってもこのストラテジーには大きな違いがあり、基本語順がSVO語順の言語においては、文焦点の文がかなり有標な形態を示すことがわかった。

まず存在文のストラテジーをとるのは下記の諸言語である。中国語は厳密に言えば存在動詞を用いていないが、VS語順は中国語学でいう「存現文」で用いられるので、ここで取り上げる。ドイツ語もスペイン語やフランス語と対照すればよくわかるが、存在文とのつながりを持った構文として位置づけることができるだろう。

- ・アラビア語：[4]の問いで不定の主語のみを取る *fi*：「在る」を用い、主語は後置する。応答文でも不定の名詞「客」は後置される。ただし[9]の答えはSVO語順のままである。

[4] どうしたの? — 今、お客さんが来たんだ。 【文焦点(自動詞文)】

*fi* : *ha:ga* *ħašalet* ? — *ka:n* *ga:l-i* *bass* *duju:f*  
 ある 事(女) 起きた(3単女) (コンピュータ過彼) 来た(彼)-に-私 過ぎない 客(複数)

- ・インドネシア語/マレーシア語：[4]の問いでも答えでも *ada* 「在る」を用いて主語は後置する(複雑存在文と呼ばれる)。インドネシア語で[9]の答えはSVO語順のままだが、*itu...*、「その」などで文を始める(つまり「状況的な主題」を伴う)。

[4a] *Ada apa?*

*exist what* 「何があったの?」

[4a'] *Kenapa?*

*do.what* 「どうしたの?」

[4b] *Eh, ada tamu nih.* 「あつ、客がいるんだ。」

*INTJ exist guest PTCL*

- ・ラオ語、クメール語：[4]応答では「在る」を文頭に用いるが、その後は「客 来る」とSV

語順である。ただし「客」は「在る」の目的語をも兼ねているのかもしれない。例文は省略する。

- ・中国語：[4]の応答文では VS 語順である。S は「一」を伴わない類別詞とともに用いられている。[9]では是（コピュラ）の後に節を続けるか、回想を示す来着を後続させている。

[4]（電話で）

「どうしたの？」「うん、お客さんが来たんだ。」【文焦点（自動詞文）】

“怎么了？”“没什么，家里来了位客人。”

どのよう [実現] 何でもない 家に 来る [実現] [助数] 客

- ・スペイン語：[4]の応答文では ha ~ (has ~) を文頭に用い、後続する節全体を新情報にしている。que をさらにその前に用いて理由の説明としている。

[4] [電話で]「どうした（の）？」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

¿Qué pasa? –Nada, que ha venido un cliente.

what happens? nothing, CONJ. has come(pp) a client

- ・フランス語：[4]の応答文では Il y a ~ (there is ~) を文頭に用い、後続する節全体を新情報にすることを可能にしている。[9]では SVO のままだが、導入句を用いている。

[4]（電話で）「どうした（の）？」

*Qu' est-ce qui se passe?*

PINT.NH PRST REL.NOM happen.PRS

「うん、今、お客さんが来たんだ。」

*Non, rien. Il y a un client qui est arrivé*

no nothing there-is a client REL.NOM arrive-PST

[9]「どうした（の）？」（インフォーマント A）

*Qu' est-ce qui se passe?*

PINT.NH PRST REL.NOM happen?

「うん、一郎が（自分の）弟を叩いたんだ。」

*Eh ben, Ichiro a tapé son petit frère.*

eh well, Ichiro hit.PST his young brother.

- ・ドイツ語：[4]の応答文では Es ist ~ (It is ~) を文頭に用い、後続する節全体を新情報にすることを可能にしている（ただしドイツ語の存在文は Es gibt ~ のような形式となる）。[9]では SVO のままだが、主語に第 2 アクセントを置き、全体が新情報であることを示している。

[4]（電話で）「どうした（の）？」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

M: Was ist denn los? N: Es ist gerade **jemand** gekommen.

what.NOM is-3SG PART going.on it-EXP is-3SG just someone.NOM come-PP

何が起こったの? ちょうど誰かが来た.

[9] (電話で)「どうした(の)?」「うん、ハンスが(自分の)弟を叩いたんだ。」

M: Was ist denn los? N: Hans hat seinen kleinen **Bruder** gehauen.

what-NOM is-3SG PART going.on Hans-NOM has-3SG his little brother-ACC hit-PP

何が起こったの? ハンスが自分の弟を叩いた.

このように存在文もしくはそれに準ずる構文要素によって文焦点を表現する言語は、アラビア語を除けば東南アジアの本来的な孤立語、もしくは屈折を失って孤立語化してきた印欧語である。孤立語的な特徴はSVO語順を要求すると言われている。SVO語順では、Vの前の位置が主題のおかれる位置となっており(ただしドイツ語では定形第2の規則があるようにVの前は主語とは限らないが)、そのためにデフォルトの文では文焦点が表現できず、存在文もしくはそれに準ずる構文要素の使用が必要になるものと考えられる。またこれらの言語群は先の項焦点の節で、述語の非出現が可能であった言語群と大きく重なっており、両肢型の言語という観点から説明することもできよう。

これに対し、特に特別な構文要素や語順を何も必要とすることなく文焦点を表現できる言語は、下記のようにもっぱらどれもSOV語順のアルタイ型言語である(ハンガリー語(語順自由)、フィンランド語および中国語(SVO語順)を除く)。ただここでもやはり文焦点にするため、存在文に観察されるような特徴が現れている。すなわち、時や時間を示す名詞項が主語項に先行するという特徴である。朝鮮語、モンゴル語ハルハ方言、ペルシア語、ハンガリー語、ウルドゥー語では、[4]の応答文の文頭に「今」が現れている。フィンランド語でも、nyt「今」に節を後続させると「事実を強調する」という。トルクメン語と中国語では「家に」、ダグール語では「うちに」が主語に先行し、文頭に現れている。これらの言語は、時や時間を示す名詞項を主題とすることによって、それ以降の文全体を焦点にすることを可能にしているものと説明できよう。さらに言えば、これらの言語は単肢言語であり、主語項や目的語項と時や時間を示す名詞項などは統語的に等価(?)であることがこうした表現形態成立の後ろ盾となっているとみることができよう。以下にはモンゴル語ハルハ方言とトルクメン語の例を挙げる。

[4] [電話で]「どうしたの?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

“Яасан?” “Аан, сая зочин ирсэн шүү”

yaasan	aan saja	zočin	irsen šüü
yaa-sAn	aan saja	zočin	ir-sAn=šüü
to.do.what-PERF	INT	just.now	guest to.come-PERF=PTCL

[4] [電話で]「どうした(の)?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

Näme bol-dy?

何 ある-PAST

「何があったの?」

Öý-e häzir adam gel-di.

家-DAT 今 人 来る-PAST

「家に今人が来たんだ。」

他に、文焦点を示すため存在文的なストラテジーを用いる以外に、主語が新情報であることを示す要素が観察される言語がある。まず朝鮮語では、[4]、[9]とも主語には -i 「が」(非主題化?) がつき、主題を示す -(n)un はつかない。ラワン語でも、[4]、[9]いずれにも主題化の要素は現れない。ウルドゥー語では、[4]の応答文において、ek 「1」を「客」につけている。ハンガリー語でも[4]で「1」に由来する不定冠詞が現れている。やはり不定であることを示すためか、ナーナイ語やグイ語では[4]の「客」を示すのに「人」を用いている。これらは文焦点を示すために補助的に機能しているものと考えられる。ハンガリー語[4]、朝鮮語[9]の例を示す。これらの言語ももっぱら SOV 語順の従属部標示型言語である。従属部標示型の言語であるがゆえに、このように情報構造を示す要素もやはり名詞項の側に表示するものと考えられる。

[4] (電話で)「どうした(の)?」「うん、今、お客さんが来たんだ」

„Mi van vel-ed?”

何が BE INST-2SG

„Na, most egy vendég jö-tt.”

ええ 今 a お客 来る-PST.3SG

[9] [電話で]「どうした(の)?」「うん、一郎が(自分の)弟を叩いたんだ。」

mwusun il-i-ya?

なんの 事-COP-INTRR

「どうした? (lit. なんのことだ?)」

ung ichilo-ka (caki) namtongsayng-ul ttayly(< i)-ess-e.

うん 一郎-NOM 自分 弟-ACC 叩く -PST-DEC

#### 4. 「係り結び」はどのように位置づけられるべきか?

Whitman (1997) によれば係り結びとは①コピュラなどに由来する係助詞が焦点となる項を指示し、②これを含む節が名詞化され名詞化した結びの述語が係りのスコープとなるような、一種の分裂文であるという。Whitman (1997) は係り結びを「その場分裂文」in-situ cleftとも呼んでいる。

風間 (2003) では、「係り結びとは「文中のある要素を強調し、それに強調のマーカークがつく際に、述語動詞が一定の形(名詞的に働く、形動詞的な形)をとることを要求する」現象といえることができる。いいかえれば、動詞文をコピュラ文の中に投入するプロセスと見なすことができる。」とした。

今回の調査により、世界の諸言語が題述焦点に対して意味的に有標である項焦点に対して、どのような表現を用いてこれを表現しようとするかということの一端をあきらかにすることができた。これを表を用いて整理するとともに、係り結びをその中に位置づけると

下記のようなになる。

表 2: (世界の諸言語の一部にみられる) 項焦点の表現

述語の出現	名詞のとりたて標示	述語の名詞化／節化	語順の逆転	観察される言語	名称
+	(+)	-	-	多くの言語	プロミネンス
+	+	(-)	-	アルタイ諸言語の一部など	とりたて
+	-	+	(-)	インドネシア語など	疑似分裂文
+	-	+	+	印欧語の一部など	分裂文
-	-	(-)	(-)	スペイン語など	述語非出現
+	(+)	(+)	-	古文、琉球の一部など	係り結び
(+)	-	-	+	ロシア語など	倒置、自由語順

表 2 について若干説明を加える。まずもっとも簡単な方法は音声的にプロミネンスを加えることであろう。これは表示する専用形式が現れないものの、項焦点の項を音声的にとりたてるものと言ってよいだろう。

次に、従属部表示型の言語であれば、名詞項に何か標示をすることが一般的であるので、何らかのとりたての専用形式を用いることが考えられる。ただし **head final** の語順の縛りがきつければ語順は動かすことができず、単肢型の言語であれば述語の非出現が許されない。これはアルタイ諸言語などによくみられるタイプであるが、言語によっては特に属性叙述の場合などに形動詞（古文の連体形のような機能の形）を用いる言語も多くある（したがって述語の名詞化を (-) としてある。

特に語形変化の少ない孤立型の言語を中心とした **SVO** 語順の言語では、動詞の前後の位置を文法関係の標示に用いているため、主題-題述の順序にすると述語-主語となってしまうこれと矛盾する（それでも中国語などでは存現文でこの語順を使用する）。そのため述語を名詞化／節化した上で語順の逆転を行う。これが分裂文である。「述語」をどう定義するかにもよるが、少なくとも見かけ上語順の逆転を伴わないものもあり、これを疑似分裂文と呼ぶ（オーストロネシア語族やチベットビルマ語族における疑似分裂文の定義を参照すべき、なおインドネシア語などで語順は逆転してもかまわないのでその欄は (-) としてある）。さらに、(It is) Ichiro. のような分裂文の焦点のみが残された場合、これは述語非出現のタイプとなる。これは潜在的には述語の代名詞化と語順の逆転を基盤にしていると考えられる（したがってその欄は (-) としてある）。

さらに語順はそのまま、名詞のとりたて標示と述語の名詞化／節化の両方を行う場合、その呼応が注目され、係り結びと呼ばれる。ただしとりたて標示がない場合もあるので、これは (+) としてある（他方、いわゆる係り結びの「ながれ」もある）。

最後に、今回の調査では調査対象の言語となっていないが、ロシア語のような言語では名詞も動詞も豊かに屈折するので、文法関係の標示に語順を用いる必要がなく（いわゆる自由語順の言語）、語順はもっぱら情報構造の標示に用いられる。

このように言語の他の類型的特徴との相関によって、項焦点の標示のストラテジーも言語によって変わってくる（変わらざるをえなくなっている）ものと考え（ただし、古文や琉球諸方言でなぜ係り結びが必要なのかはまだ十分説明できていない）。

係り結びの位置づけについて、Whitman (1997) の定義との対照を通じまとめると、次のようになりそう。

・係り結びは分裂文の一種、というより、項焦点の表示方法の 1 つで、むしろ分裂文と等価に位置づけられるものである。

[参考文献]

風間伸次郎 (2003) 「アルタイ諸言語の 3 グループ(チュルク・モンゴル・ツングース) 及び朝鮮語. 日本語の文法は本当に似ているのか—対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン・長田俊樹 (共編) 『日本語系統論の現在』日文研叢書 31: 249-340. 京都: 国際日本文化研究センター.

風間伸次郎 (2015a) 「日本語 (話しことば) は従属部標示型の言語なのか?」『国立国語研究所論集』9. 51-80.

風間伸次郎 (2015b) 「対照研究で読み解く日本語の世界 —ツングース諸語をはじめとするアルタイ諸言語—」『日本語学』34 卷 11 号, 58-67.

亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 第 6 卷 術語編』東京: 三省堂  
Whitman, John (1997) Kakari musubi from a comparative perspective. In: Ho-min Sohn and John H. Haig (eds.) *Japanese / Korean linguistics* 6, 161-178. Stanford: CSL.